

園番号 702

令和3年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 井上 邦子
全園児数 105名

1. 研究主題 「心豊かで 生き生きとたくましく活動する子どもの育成をめざして」
～一人一人が自分らしさを発揮しながら
互いに響き合う姿を見つめて～
2. 研究年度 初年度
3. 研究主題設定理由

子ども達は、遊びや生活の中で〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、様々な経験や体験を通じて学び、成長している。園には0歳児から5歳児までの子どもが在籍しており、国籍や性別、言語や生活習慣の違い、また、集団参加や人との関わりで様々な困り感を抱えているなど、多様な子どもが共に生活を送っている。発達の特長や個人差など一人一人の子ども理解を深めると共に、子ども達が「やってみよう」「やってみたい」と自らわくわくと心を動かす姿を見つめ、互いにどの様に影響し合い、関係性が変化していくのかを追及したいと思い、研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・多様な子ども一人一人が、わくわくしながら夢中になって〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊ぶ姿に着目し、保育内容の工夫や子ども理解を深める。

②研究の重点

- ・乳幼児の発達に応じた保育内容を工夫し、多様な子ども達が、わくわくドキドキと心が動かし〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、どのように響き合いどのように変化していくのかについて考える。

③活動の方法

自分らしさを発揮している姿 _____ 〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わる姿
_____ 関わりによって変化した姿

【0歳児】6月 安心してね A児(2か月)の姿から

A児(2か月)は、抱っこをしていると眠るが、物音に敏感で眠りが浅く、布団に寝かそうとすると目覚め泣き出したり、授乳時には哺乳瓶を嫌がり飲もうとしなかったり不安定な姿があった。少しずつ保育時間が長くなるにつれ、いつも世話をしてくれる保育者が分かるようになり、泣いていてもその保育者があやすと泣きやみ安心した表情を見せるようになる。授乳時「おなかすいたね」「ミルクおいしいね」とほほえみ、声を掛けることを繰り返す内に、保育者の顔をじっと見て目と目が合うことが増えてきた。徐々にミルクの量も増え、飲み終わるとニッコリと笑みを見せるようになる。お腹が空いたり、眠くなったりすると保育者を求め泣いて欲求を知らせるようになってきた。



<評価>

- ・日々の関わりの中で、安心して甘えることができるように本児の姿に寄り添い、心地良い環境をつくった。また、生理的欲求を敏感に受け止め、全てを心から受け入れる日々の積み重ねによって、安心した表情を見せるようになった。一人一人の生活リズムを大切にしながら、愛着関係を築き家庭的な雰囲気の中で過ごせるように関わりを大事にしていきたい。

【1歳児】6月 もっかい A児（1歳8か月）の姿から

保育者とブロックを重ねて遊んだことがあるA児は、電車の線路の近くに座り、1人で重ねようとしてみるが思うようにできず、「んん・・・」と顔をしかめる。その様子から、ブロックを重ねてトンネルをつくり、電車の玩具を走らせたいのだと感じた保育者が、「くっつけるの難しいね」と思いを受け止め「一緒にやってみようか」と声をかける。するとA児は和らいだ表情で頷き、「これ」とブロックを保育者に渡す。A児は、保育者と一緒にブロックを重ねることができると「できた!」と喜んだ。その後も嬉しそうに「もっかい」とブロックを繰り返し保育者に渡し、トンネルができると、その中に電車の玩具を走らせて遊んでいた。



<評価>

- ・子ども達と日々関わる中で、一人一人の安心できる環境があるからこそ、子ども達は「やってみたい!」と思い、それぞれのしたい遊びができると実感する。言葉だけでなく、子どもの表情や仕草から言葉にならない思いを保育者が汲み取り、十分に受け止めていき、子どもが何を(どのように)したいのか、周りの状況(行動の前後)から察知することで、子どもの本当の思いに共感し、思いを満たすことができると考える。子ども達が安心して、安定した環境の中で過ごせるように、子ども達への丁寧な関わりをこれからも大切にしていきたい。

【2歳児】6月 できた A児（2歳11か月）の姿から

午睡前に保育者がA児に「パジャマに着替えよう」と誘い掛ける。A児は「いや」と言って床に寝そべり、自分の思いを表現する。保育者はA児の思いを受け止めて「いやなんだね。待ってるからね」と声を掛け、その場を離れて見守る。暫くして保育者がもう一度「着替えよう」と優しく声を掛けるとA児は保育者を見つめて「うん」と頷き、保育者のもとに歩いて来る。「待ってたよ」とA児を温かく受け入れ、自分でしようとする姿を見守りながらさりげなく着替えを手伝う。「できたね。えらかったね」と伝えるとA児は笑顔で頷き、安心して眠った。



<評価>

- ・2歳児の発達の特徴は、ついさっきまで機嫌よく遊んでいたかと思うと、急にだだをこねたり、「いや」「自分で」と反発したりする姿がある。毎日の生活の中で子ども達が「できた」喜びや満足感を味わうことができるように芽生えた自我を摘み取ることなく、安心して自分の思いを表出できる環境をつくり、子どもの甘えを保育者がしっかりと受け止めたことで、A児の気持ちが切り替わり、安心して次の行動に移すことができたと感じる。思いを受けとめることで、「自分は自分でいいんだ」と自己肯定感の高まりとなるように願っている。

【3歳児】5月 おだんご一緒につくろうか

5月、子ども達は少しずつ園生活に慣れ自分の好きな場や遊びを見つけて遊んでいる。砂場では、できた水溜まりで車を走らせたりバケツの泥でお料理づくりをしたりしている。砂場の近くで友達が遊ぶ様子をじっとして見ているA児。A児は環境の変化に馴染みにくく、思いを言葉で伝えることも難しいが、進級から1か月が過ぎてやっと泣かずに登園するようになった。砂場遊びや友達が遊んでいる姿に興味を持って見ている様子のA児に、保育者が「おだんご一緒につくろうか」と声を掛け、1つつくって見せると、A児の表情が和らいだ。「触ってみる？」とおだんごを差し出すと指先でそっと触れてみるA児。次に保育者が「どうぞ」と泥が入ったバケツを差し出すと、自分から手を伸ばしギョッと握り、保育者を見てニッコリ笑った。



<評価>

- ・まわりの環境にわくわくと心を動かして遊ぶ子どもと、友達の遊びに興味を持つが、自分から「やってみたい」「やってみよう」と気持ちを表出できない子どもがいる。その両者を保育者自身がわくわくとした気持ちでつないだり、遊びの展開につながるような環境を子ども達と一緒につくったりしていくことで、友達と関わる楽しさを感じたり互いに響き合ったりするように育つのではないかと思う。

【4歳児】5月 A君すごい！

ベトナム国籍のA児は、日本語の理解や発音など言葉での伝わりにくさがあり、周りの状況に刺激されやすい傾向にある。進級当初は、言葉の意味を聞き返して日本語で真似たり、分からないことがあると「なんで？」と保育者に聞いたりする姿が多かった。友達のことが大好きで、友達と場を共有したり、つくって遊んだり転がして遊んだりすることに興味を持って遊びを楽しんでいた。テーブルを斜めに立て、転がし遊びを楽しんでいるA児。空き箱や空き容器をたくさん用意し置いておくと、それらを組み合わせてつくり、つくった車を走らせたり、ビー玉を転がしたりすることが楽しく、何度も繰り返し遊んでいる。同じ場所で遊んでいたB児のつくった車が、A児の車より速いスピードで斜面を走のを見て「B君すごい」と拍手しながら驚いた気持ちを伝え喜んでいた。B児も「A君のかわかいいね」とA児の車を指差して気持ちを伝えると、A児は「僕のかわかいい」と嬉しそうに車を見せて喜んだ。



<評価>

- ・友達が大好きで、様々な友達と関わりたいA児（ベトナム籍）であるが、日本語の理解や発音など言葉での伝えにくさがあるため、友達とのやりとりが上手くいかない。保育者が思いを汲み取り代弁したり、伝えたい思いを受け止めたりしたことで、「すごい」「ありがとう」と感情や場面に合った言葉で気持ちを伝えたり、思いをうまく表現したりできるようになってきた。また、保育者が身振りや手振り、表情でA児に伝えたり、イラストや写真を利用して生活の流れを知らせたりしていく姿を見て、他児もA児に対して、身振りや手振りで行動を知らせたり、言い間違った言葉を言い直してあげたりする姿も見られるようになってきた。遊びや生活を通して、一人一人がクラスの中でのびのびと表現し、互いに認め合える仲間関係に育ってほしい。

【5歳児】 5月 レモンジュースみたい

進級し1か月がたったが、新しい生活に不安を感じている様子で表情が硬いA児。保育者が遊びに誘ってみるが遊ぼうとせず、周りの様子をうかがいながら、したい遊びをなかなか見つけられないでいた。身近な草花を集め、色水遊びをしていたB児の様子を少し離れた場所から見ている様子があった。



遊びに使えるように草花を子ども達が取りやすいように並べておくと、B児が草花を集めて色水遊びを楽しみ始めた。「みんなで(4歳の時に)植えたパンジー、すりつぶしたらきれいやで」と保育者に嬉しそうに話す。保育者は「きれいな色だね」とB児の気付きや楽しそうな様子を受け止め、さらに見守った。B児の様子を見て、C児も「私も一緒にする」と遊びに加わる。「いいよ。一緒にしよう」と嬉しそうなB児。A児はその様子を近くで見ている。できあがった色水をカップやペットボトルなどに入れられるように用意しておく、B児とC児が様々な色の色水をつくり、カップやペットボトルに入れている。B児はつくった色水を棚に並べてみる。「おいしそう。本物のジュースみたい」とB児とC児は笑顔で話している。棚に並んだジュースを見てA児が「レモンジュースみたい」とつぶやく。その言葉を聞いて、B児は「Bちゃんがつくってんで、Aちゃんも一緒にする？」とA児を誘う。恥ずかしそうにしていたA児だったが「一緒にする」と遊びに加わった。B児は「このお花使ってもいいよ」と優しくA児にお花を渡すとA児は「ありがとう」と嬉しそうな表情を見せる。その後一緒にジュースづくりを楽しみ、紫の色水をつくるA児に、B児「Aちゃんのぶどうジュースみたいやな」。C児「おいしそうやな。本当に喉乾いてきたな」。A児「今度はいちごジュースもつくってみたいな」と遊びの中で会話を楽しんでいた。

<評価>

- ・進級当初は新しい生活に期待をもって楽しんでる幼児や新しい生活に不安を感じている幼児など様々な姿が見られたが、少しずつ新しい生活に個々のペースで慣れ、したい遊びを見つけて楽しむようになっていった。保育者が遊びに誘うが周りの様子に目を向け、なかなか遊びに入ってこようとしないA児だったが、自分の興味のある遊びを近くで見ている姿があり、遊びに加わるタイミングを自分のペースで見極めていたのかなと感じる。A児の「レモンジュースみたい」というつぶやきをB児がタイミングよく受け止めてA児に声を掛けてくれたことがきっかけとなり、A児もやってみようという思いが生まれた。友達との関わり大切さを感じることができた。遊びの中で友達と関わり合い、響き合いながら共に育ってほしいと考える。

5. 研究の成果

- 子ども達が、何にわくわくと心を動かしているのか、どう自分を表現しようとしているか、子ども同士がどのように響き合っているのかを理解し、日々の様子を振り返ることの大切さを再認識した。更に、全職員で子ども一人一人の様子やクラスの実態を共有し、共通理解できたことによって発達の連続性を意識した保育につながった。また、子どもの成長や発達の過程で保育者の存在や考え・態度などが、将来へ大きく影響するであろうことも共有できた。

6. 今後の課題

- 今後も、子ども達が「自分が好き」と思い自己肯定感を持ち、相手を尊重できる人になって欲しいと願い、「わくわくドキドキ響き合う都祁の子」を育てていきたい。
 - ・保育内容の充実を図り、〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊び込むための環境構成や援助を工夫する。
 - ・子どもの姿からそれぞれの年齢の特徴を捉え、発達の連続性を意識した保育を継続していく。
 - ・多様な子どもの姿を受け止めて、子ども一人一人の理解を深め、保育者間で共有することを大切にする。